

第5部 群島内各地域の取組

第1章 基本的考え方

第1節 地域の多様性に応じた取扱い

奄美群島は、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の8つの有人島から構成されており、各地域ごとに自然の特性や人と自然との関わりが存在します。

奄美の「宝」を保全・活用するための施策を考える際には、こうした地域の多様性や差異を認識することが大切です。例えば、保全のあり方を考慮する場合は、守るべき自然の特性に応じた取組を工夫しなければなりません。また、活用のあり方を考慮する場合は、地域の自然とそれに根ざした産業や文化などの差異を認識してこそ、地域の個性を効果的に表現することができると考えられます。

したがって、群島を全体として見た際の、とりわけ顕著な価値を有する代表的・普遍的な「宝」を各地域の特性に合わせ保全・活用することに加え、各地域それぞれ固有の「宝」についても、各地域毎に保全・活用を図る必要があります。

第2節 地域の意思に応じた取扱い

「プラン」の策定にあたっては各市町村において、地域の住民などの参加を得ながら「宝さがし」を実施してきました。「宝さがし」の実施にともない、探し出された「宝」の取扱いについて、地域としての意思表示がなされてきたところです。

奄美の「宝」は、各地域の意思をともなって見い出された資源であり、地域の意思や主体性そのものを価値として認め、こうした価値を基礎とするものです。

そこで、施策として「宝」を取扱っていくにあたっては、自らの地域の「宝」をいかに保全し、いかに活用していくかという各地域の意思を尊重して、個別的・具体的に考えていく必要があります。

第3節 群島内の地域区分

上記のような考え方のもと、自然環境及び社会経済上の条件や他の計画との整合性等に配慮し、市町村を単位として、奄美群島を以下の6つの地域に区分します。この6つの地域区分のそれぞれについて、まず地域の「宝」を概観し、続いて第4部の施策に基づく具体的な施策の例を示します。

1. 奄美大島北部

名瀬市，龍郷町，笠利町の一市二町からなる地域。

2. 奄美大島南部

大和村，宇検村，瀬戸内町，住用村の一町三村からなる地域。

3. 喜界島

喜界町からなる地域。

4. 徳之島

徳之島町，天城町，伊仙町の三町からなる地域。

5. 沖永良部島

和泊町，知名町の二町からなる地域。

6. 与論島

与論町からなる地域。

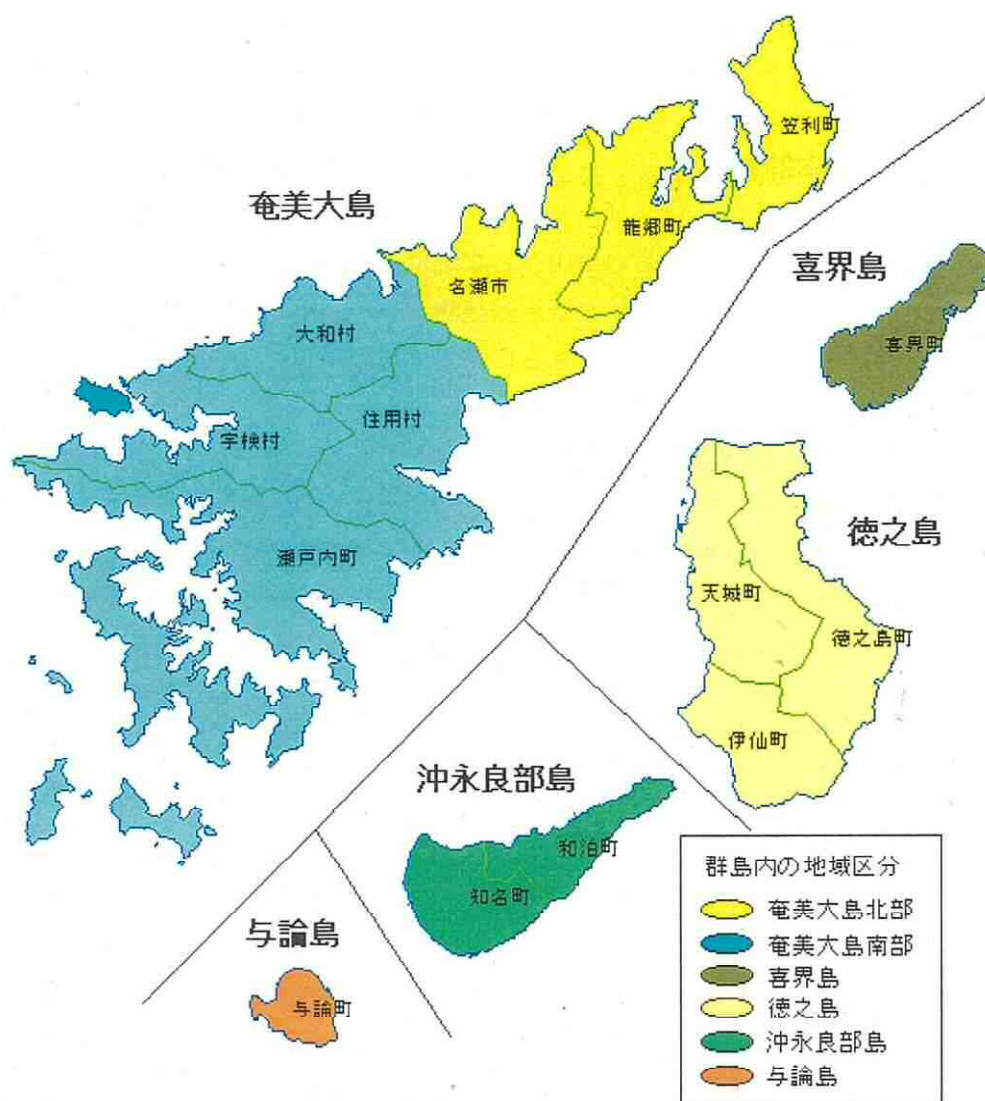


図5-1 奄美群島自然共生プランにおける群島内の地域区分

第2章 奄美大島北部

第1節 基本的考え方

奄美大島北部は、おおむね山がちな地形と湾入の多い海岸を有しています。山地には森林が広がり、希少な野生動植物が分布しています。また、海岸には発達したサンゴ礁が見られます。さらに、居住地の周辺には伝統的に利用されてきた身近な自然も残されています。

他方で、この地域には奄美群島の人口の42%（約56,000人）が集中しており、群島の社会経済の中心として機能しています。また、奄美空港や名瀬港などの施設を有し、群島全域と他地域との交通の結節点として機能しています。

この地域においては、原生的な自然と都市や農地など人為的な利用とが近接していることが特徴です。両者の調和に特に留意をしながら、希少な野生動植物や森林、サンゴ礁を含む海岸及び身近な自然を保全することが重要です。また、環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）など観光面での活用や対外的な情報の発信にあたっては、この地域が、群島全域のいわば「玄関」として積極的な役割を果たしていくことが期待されます。

第2節 地域の「宝」

1. 「サンゴ礁と海岸」に関わる「宝」

（1）サンゴ礁

この地域には、優れたサンゴ礁（裾礁）が見られ、特に、笠利半島や名瀬市の北岸などには被度が高い場所があります。また、笠利半島は礁池の幅が数百メートルに達する場所があります。

（2）干潟や藻場

笠利湾沿岸には小規模ながら干潟が見られ、そこには甲殻類、ナマコ類、貝類の他、希少な底生生物が生息し、きわめて高い生物多様性を有する干潟であることが指摘されています。また、笠利湾を中心として藻場が見られます。

なお、笠利湾では、ジュゴンの目撃も報告されています⁴⁸。

⁴⁸ 琉球大学農学部と北海道大学の共同調査により、平成14年11月から平成15年4月にかけて、笠利湾でジュゴンが目撃されていることが分かった。（琉球新報 平成15年6月20日（金）記事 などより）

(3) 海岸の動植物

海岸には、アダンやオオハマボウなどの海岸植生、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。また、一部の海岸はシギ・チドリ類やアジサシ類など渡り鳥の中継地や繁殖場所として知られています。

2. 「希少な野生動植物と森林」に関わる「宝」

(1) 自然植生に近い森林

山地の一部にはスダジイを主とする常緑広葉樹林が残されており、特に名瀬市金作原^{きんさくばら}の国有林は自然植生に近い森林です。また、名瀬市のおおかわ^{おおかわ}など河川の上流部は、下流域に発達した都市部の水源であるとともに、希少な動植物の生息・生育場所となっています。

(2) 希少な野生動植物

自然植生に近い森林や河川を中心に、アマミノクロウサギやアマミヤマシギなど固有種・遺存種を含む希少な野生動植物が生息・生育しています。

3. 「身近な自然」に関わる「宝」

(1) 身近な動植物

居住地や農地の周辺には、身近な動植物が見られます。例えば、リュウキュウアサギマダラやコオニユリなどの動植物、アダンやフクギなど防風や防潮に役立つ植物、ソテツや薬草などの食用・救荒植物、さとうきびやシャリンバイなど伝統的産業に利用される植物、イセエビ類や海藻類など水産物として利用される動植物などが挙げられます。

(2) 身近な景観

身近な動植物をはじめ、サンゴ礁、砂浜、岩礁、^{たちがみ}「立神」、入江と岬などの海岸の地形、河川や湧水などの水源、二次林やさとうきび畑などの土地利用などが、この地域らしい身近な景観をつくり出しています。特に、名瀬市の^{こみなと}小湊地区においては、「小湊集落と畑地のソテツ」が、龍郷町においては、「^{がきりよう}垣漁」が、文化庁の文化的景観重要地域に挙げられています。

4. 「自然と関わる産業や文化」に関わる「宝」

(1) 伝統的な産業

この地域では、大島紬や黒糖焼酎など、身近な自然を利用し、これらと関わりながら形成されてきた伝統的な産業が今なお盛んです。

(2) 史跡や伝統行事

笠利町の宇宿貝塚や名瀬市小湊のフワガネク遺跡など数多くの史跡が残されています。また、秋名アラセツ行事（国指定の無形民俗文化財）や八月踊りなど伝統行事も見られます。これらは、大島北部地域における人と自然との伝統的な関わりを表しているものと考えられます。

第3節 主な具体的施策の例

1. 「金作原」周辺の保全と活用

名瀬市の金作原国有林や大川上流の渓流域には、自然植生を残す亜熱帯常緑広葉樹林や多くの希少な野生動植物が見られ、希少な野生動植物と森林を保全する観点から大島北部地域において重要な場所です。

また、市街地の近隣にあり、環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習など活用の中場としても大きな可能性を有しています。しかし、アマミノクロウサギなど希少な野生動植物の一部については、マングースなど移入種の捕食による個体数の減少が問題となっています。また、土地利用による植生の改変によって、生息環境の変化や分布域の縮小が生じています。さらに、今後、観光活動による入込者の増加などにより植生破壊や乱獲・盗掘などの問題などが深刻化する可能性があります。

現在、金作原には国の自然観察教育林や県設鳥獣保護区が設定されていますが、この地域の重要性に鑑み、森林の連続性の確保、利用の調整などを考慮しながら保護地域のあり方について検討を行う必要があります。また、移入種対策については、マングース駆除事業を継続する必要があります。ノイヌ・ノネコについても実態を把握し飼育管理の徹底などの対策に努めます。さらに、保全と活用を総合的に進めるための地域的な計画を策定した上で、ガイドラインの策定、ガイド人材の育成や必要最低限の施設整備（歩道、案内板、トイレ等）、利用のモニタリング調査などを行うことが必要です。



金作原原生林（写真提供 濱田太）

2. 「奄美自然観察の森」周辺の保全と活用

（1）「奄美自然観察の森」の保全と活用

長^{ながくも}雲山系の森林は希少な野生動植物の生息・生育場所であり、オキナワウラジロガシなどの巨樹・巨木も見られます。「奄美自然観察の森」などの自然に関する普及・啓発の施設も整っています。

そこで、「奄美自然観察の森」を、この地域における自然とふれあい学習する場や自然体験の場としての拠点施設として位置付け、その機能を充実・強化することが必要です。

この地域の希少な野生動植物の一部（アマミノクロウサギなど）については、大島南部から切り離された規模の小さな分布域が孤立しているため、個体群としての存続が危ぶまれています。この背景としては、名瀬市街地の近郊で土地利用による植生改変の程度が高いこと、またマングースなど捕食性の移入種の生息密度が高いことが考えられます。今後、これらの生息場所となっている森林を保全し、移入種への対策を徹底するとともに、できるかぎり大島南部との間で森林の連続性を確保するなど対策を検討する必要があります。



奄美自然観察の森（写真提供 龍郷町）

（２）周辺地域の「宝」の保全と活用

「奄美自然観察の森」の周辺の地域に目を転じると、今井崎から安木屋場には国定公園が設定されており、被度の高いサンゴ礁、巨大な大仏サンゴ、オカヤドカリの生息場所、イトバシヨウやソテツの群生地などが見られます。また、秋名付近には水田が残されており、湿地環境に依存する動植物の生息・生育場所となっています。さらに、この地域には平瀬マンカイ・ショチョガマ、サタヤドリ（製糖小屋）、泥染の龍郷柄の技法など文化に関わる「宝」も見られます。

そこで、これら周辺地域については、「奄美自然観察の森」における自然体験や学習とあわせて、様々な自然や文化を体験・学習するための利用施設やプログラム等の整備について、保全のあり方と一体となった検討を行います。

３．海中公園地区周辺におけるサンゴ礁などの保全と活用

この地域の海域には、まとまった規模のサンゴ礁や干潟・藻場など非常に多様な生態系や景観が見られ、笠利半島や名瀬市北岸などには、沿岸部もあわせて国定公園の海中公園地区や特別地域等が設定されています。

（１）笠利半島東岸の保全と活用

笠利半島の東岸には被度の高いサンゴ礁が見られ、用海岸の地先には国定公園の海中公園地区が設定されています。また、白い砂浜、ガジュマル、アダンやソテツの海岸林などがサンゴ礁と一体となって奄美らしい海岸の景観をつくっています。さらに、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所、アサギマダラの集団越冬地なども見られます。この海岸林の景観を活用して、宇宿海岸には保健休養のための歩道や広場が整備されています。今後も、赤土等の流出防止に努めるとともに、海岸林の維持管理を促進するなどして海岸の景観を一体として保全します。

（２）笠利湾の保全と活用

笠利湾には、サンゴ礁、干潟、藻場など多様な海域の生態系が見られます。また、波が穏やかであるためシーカヤックやフィッシングなどの利用に適しており、近隣には宿泊施設が整っています。さらに、笠利湾内の龍郷湾などには、垣漁の跡があるなど伝統的な利用も残されています。今後、保全の方策や、環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）など自然体験・滞在型観光と環境教育・環境学習などの場としての利用を併せて検討する必要があります。

なお、笠利町においては、藻場の造成などの調査・研究も始まっており、今後はこのような取組も充実していく必要があります。

(3) 赤崎から摺古崎の保全と活用

赤崎から摺古崎周辺の海域においても被度の高いサンゴ礁が広がり、アダン群落、ウミガメの産卵、オカヤドカリ、渡り鳥の飛来なども見られます。摺古崎の地先には国定公園の海中公園地区が設定されています。奄美海洋展示館、大浜海浜公園、小浜キャンプ場など環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）、普及・啓発、調査研究の拠点となる施設も既に整備されています。

現在、サンゴの白化、オニヒトデ等の食害、砂浜の減少など保全上の課題が生じています。保護地域のあり方を再検討するとともに、モニタリングの実施、オニヒトデの駆除、サンゴなどの再生の検討などの対策を進めます。さらに、摺古崎のサガリバナ群生地、根瀬部のツツジ自生地、赤崎公園の星空などの資源も組み合わせ、近隣住民向けの環境教育・環境学習のプログラムや観光客向けの環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）のプログラムなどを開発し、現在の利用に一層の厚みを持たせることが大切です。



小浜海岸（写真提供 名瀬市）

4. 名瀬市街地における身近な自然の保全と活用

人口が集中している名瀬市街地周辺においては、近接する貴重な自然への影響を最小限にとどめるための配慮が重要であり、ゴミや生活排水の適正な処理を推進します。また、山羊島や立神など海岸の岩礁地帯ではアジサシ類が繁殖しており、繁殖期の立ち入り制限などの保護対策を検討するとともに海上からのバードウォッチングなど環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を図ります。

身近な自然については、新川、永田川など市街地の河川やおがみ山公園、らんかん山公園などの園地、画家「田中一村」の終焉の家周辺地を市民の憩いの場、環境教育・環境学習の場として活用することが大切です。また、入舟町のクスノハカエデや大島支庁前のアカギ並木などの巨樹・巨木は、緑の街並みをつくるシンボルとして保全し活用します。

5. 史跡や大島紬と身近な自然の保全と活用

史跡や大島紬などの「宝」は、身近な自然の保全に資する方向で環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習への活用を図る必要があります。

（1）宇宿貝塚などの遺跡の整備

笠利町には宇宿貝塚など歴史的な遺跡が多く存在しています。宇宿地区を中心にして各地区に点在する遺跡を「回廊」として位置づけ公園としての整備を進めることも考えられます。この際には、奄美らしい海岸の景観との一体性・親和性に配慮し、湧水など身近な自然を組み合わせたコース設定などを行うことが必要です。

（2）大笠利地区の大島紬の活用

笠利町の大笠利地区には、大島紬の全ての工程について工房が存在しています。展示施設の充実、泥染め、織りなどの工程の体験など、大島紬と身近な自然との関わりをテーマとした環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）等の活用の方策や、併せてシャリンバイの植栽や泥田の保全などを検討することも重要です。



シャリンバイ（写真提供 笠利町）

（3）小湊地区の里地・集落環境の保全と活用

小湊地区には、大川中下流部の里地的な環境や身近な海岸の景観が比較的よく残されています。遺跡や伝統行事など文化的な資源も多く、奄美大島泥染公園などの施設もあります。海岸のアダン群落の再生、水田や泥田など湿地環境の再生・維持管理、遺跡と一体的な公園の整備などを進め、奄美大島の典型的な里地・集落環境をテーマにしたエコミュージアムとして整備します。



小湊地区の景観（写真提供 名瀬市）

6. 自然共生ネットワークの拠点としての機能の充実・連携強化

奄美大島北部は、群島全体の社会経済の中心であり、奄美空港や名瀬港など群島内外の交通の結節点です。そこで、自然共生ネットワークの構築にあたっては、この地域を群島全体のネットワークの核として位置づけるとともに、地域内においても奄美自然観察の森、県立奄美少年自然の家、奄美パーク・田中一村記念美術館、笠利町歴史民俗資料館等の情報発信機能の充実や連携強化によってネットワークを構築します。

（1）奄美パーク・田中一村記念美術館の情報発信拠点としての機能の充実

ア. 奄美群島全体の情報発信拠点としての機能の充実

奄美パーク・田中一村記念美術館は、優れた奄美の自然や伝統文化、伝統産業、食の魅力などを情報発信する奄美群島全体の観光拠点施設として、群島内外の方々が利用しています。

地域の「宝」に関する情報提供をより一層充実することが重要であることから、奄美パーク・田中一村記念美術館を情報発信拠点として市町村や奄美野生生物保護センターなど他の地域の拠点的な施設とネットワーク化し、情報を共有することによって、群島全体の「宝」についての情報提供機能を充実・強化させます。

また、自然との共生についてもシンポジウムやワークショップの開催など、群島内外の交流の場として、奄美パーク・田中一村記念美術館の利用を促進します。



奄美パーク（写真提供 笠利町）

イ．周辺地域の景観の維持

こうした機能に鑑み、奄美パークの周辺地域、特に名瀬市に向かう幹線道路沿いについては、身近な自然の保全や「宝」に対する配慮を徹底し、奄美らしい景観を保つことが重要です。

（２）大島北部地域のネットワーク化

奄美自然観察の森や県立奄美少年自然の家など、地域の「宝」と地理的に近接して立地する観光ないし普及・啓発のための施設については、情報の提供・収集の機能を充実させます。

また、奄美パーク・田中一村記念美術館とこれらの施設が相互に情報の共有等を行うことによって、提供する情報の質を高めるよう努めます。

さらに、解説板などの整備にあたっても、情報の統一化・体系化に留意します。

第3章 奄美大島南部

第1節 基本的考え方

奄美大島南部は、群島の最高峰である湯湾岳（海拔 694.4m）をはじめとする山地が多く、面積を占めます。山地は海岸線まで迫り、深い湾入を有する沈水海岸が形成されています。湾奥には河川が流入しています。山地のほとんどには森林が広がり、主要な希少野生動植物の分布の核心部をなしています。

また、加計呂麻島沿岸などにはサンゴ礁も発達しており、役勝川・住用川の河口にはマングローブ群落も見られます。さらに、集落周辺には伝統的に利用されてきた身近な自然も残されています。

このようなことから、この地域は、奄美群島における希少な野生動植物や森林の保全について中核的な役割を果たすことが期待されます。また、サンゴ礁を含む海岸及び身近な自然についても保全が求められます。さらに、奄美大島北部と連携しながら、これら豊かな資源を活用して環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）を推進する必要があります。

第2節 地域の「宝」

1. 「サンゴ礁と海岸」に関わる「宝」

（1）サンゴ礁

この地域にも発達したサンゴ礁（裾礁）が見られます。特に、大和村の沿岸、宇検村の焼内^{やけうち}湾湾口、瀬戸内町の加計呂麻島の沿岸などには被度が高い場所があります。

（2）マングローブ群落

住用村の住用川・役勝川河口には、メヒルギを主な構成種とするマングローブが群生しています。

（3）海岸の動植物

海岸には、アダンやハマゴウ、オオハマボウなどの海岸植生、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。

2. 「希少な野生動植物と森林」に関わる「宝」

(1) 自然植生に近い森林

この地域の山地にはスタジイを主とする亜熱帯性常緑広葉樹林が群島中最大の規模で残されています。とりわけ湯湾岳周辺、住用川上流の神屋一帯、川内川上流域などには自然植生に近い森林が存在します。また、リュウキュウマツ資源も豊富にあります。

(2) 河川

この地域には住用川、役勝川、河内川、川内川、名音川などの河川があり、その上流部は希少な野生動植物の生息・生育場所としてきわめて重要です。

(3) 希少な野生動植物

アマミノクロウサギやアマミヤマシギなど遺存種を含む希少な野生動植物の分布の中心であり、群島中で最も多くの種が生息・生育していると考えられています。

3. 「身近な自然」に関わる「宝」

(1) 身近な動植物

居住地や農地の周辺には、人との関わりが深い身近な動植物が見られます。例えば、リュウキュウイノシシ、ガジュマルの巨木、デイゴ並木などの動植物、アダンやフクギなど防風や防潮に役立つ植物、薬草やソテツなど食用・救荒植物等が挙げられます。

(2) 身近な景観

岬と入江が繰り返される海岸、海まで迫る急峻な山地、湾奥に注ぐ河川といった地形の他、身近な動植物が集落ごとに小規模なまとまりをつくり、魅力的な身近な景観を形成しています。

4. 「自然と関わる産業や文化」に関わる「宝」

高倉や群倉など農業に関わる史跡が残されています。また、黒糖や黒糖焼酎が生産されています。油井豊年踊り、諸鈍シバヤなど伝統行事も見られます。これらは、地域における人と自然との伝統的な関わりを表象しています。

第3節 主な具体的施策の例

1. 湯湾岳及び河川上流地域における保全と活用

湯湾岳の周辺や住用川など河川の上流地域は、自然植生に近い亜熱帯性常緑広葉樹林がまとまって残されており、希少な野生動植物の生息・生育の場所として重要な地域です。

現在、湯湾岳周辺に国定公園の特別保護地区が設定され、国設の鳥獣保護区も設定されています。また、神屋・湯湾岳が天然記念物に指定されています。これらは希少な野生動植物の分布に対し十分な面積や連続性を有していないと考えられることから、保護地域の拡充について検討を進める必要があります。また、種の絶滅を回避するために国などの制度により保護増殖事業等の施策を着実に実施する他、大和村においては野生生物保護条例の適切な運用に努めます。さらに、奄美野生生物保護センターを拠点として、普及・啓発及び調査研究等を総合的に推進するとともに、マングース等の駆除を継続して生息密度を抑制することが大切です。これにあたっては、奄美野生生物保護センターを拠点として、普及・啓発及び調査研究等を総合的に推進します。

また、希少な野生動植物などに影響を及ぼさないよう最大限の配慮をしながら環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）の資源として活用を図ります。奄美フォレストポリスは、自然観察などの拠点として今後ともその機能の充実・強化を図り、また、奄美フォレストポリス周辺や湯湾岳登山道など利用が見込まれる場所については、利用のガイドラインを設けるとともに、解説板や木道など必要最低限の利用施設を整備します。

また、豊富なリュウキュウマツ林の一部では、松くい虫（マツノザイセンチュウ）の被害が発生しており、全島に被害がまん延することがないように、徹底的に駆除を実施する必要があります。さらに、道路やダムなど公共の施設の整備にあたっては、森林の連続性を極力確保するなど最大限の配慮を行います。

2. 優れたサンゴ礁や海岸の保全・保護

加計呂麻島沿岸など瀬戸内町の海岸には、優れたサンゴ礁が見られ、大島海峡の一部には国定公園の海中公園地区が設定されています。しかし、この地域のサンゴ礁はオニヒトデ等の食害が特に懸念されており、場所によってはきわめて深刻な状況となっています。今後とも、オニヒトデ等駆除事業を特に重点的に行います。オニヒトデ等駆除事業については、行政や漁業者だけでなく観光業者やダイバーなど関係する幅広い主体が参加・連携して行うことが大切です。

また、被害の程度の大きな場所を対象としてサンゴの再生を検討するとともに、より一層の保全を担保するために保護地域の拡充を検討します。なお、大和村や瀬戸内町においては、藻場の造成などの調査・研究も始まっており、今後はこのような取組を充実していく必要があります。



奄美大島南部のサンゴ（写真提供 瀬戸内町）

3. すみようがわ やくがちがわ住用川・役勝川河口のマングローブ群落の保全と活用

住用川・役勝川の河口には規模の大きなマングローブ林が広がっており、そこに成立する特有で脆弱な生態系はきわめて重要です。現在、国定公園の特別保護地区や鳥獣保護区が設定されています。

この地域の重要性に鑑みれば、両河川の上流域や周辺の海岸まで含め一体として保全を行う必要があります。保護地域の拡充を検討するとともに、赤土流入によるリュウキュウアユの産卵場の消失や特有の植生の変化を防止するため、公共施設の整備などにあたっては最大限の配慮を行います。

また、この地域は、カヌーツアーなどでの利用が進んでおり、マングローブパーク等の拠点施設や展望台・遊歩道などの利用施設も整備されています。今後も、自然体験など環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習による利用を推進します。ただし、将来においては過剰利用による生態系や植生の変化などの問題が生じる恐れがあります。エコツアー事業者などによる相互の協力体制の構築や、利用の影響のモニタリングなど利用の調整についても検討する必要があります。



住用川・役勝川河口のマングローブ群落
(写真提供 (財)自然環境研究センター)

4. 東城内海の保全と活用

東城内海の近隣には、内海公園バンガロー、地域特産物販売所、休憩所、林産物加工販売所などの利用施設があります。周辺の城海岸はサーフィンの名所として各地からの愛好者に利用されており、またフナグラ（船の積み出し跡）やアサト（船焼き場）など海に関係する史跡も存在します。これらを活用して、内海一帯を海浜レクリエーション等の拠点として整備することを検討します。

5. 居住地周辺の身近な自然の保全と活用

この地域の集落は、地形的に独立性が強く、海岸の身近な自然やこれに関わる生活や文化などの「宝」も集落ごとに異なり、また分散して存在しています。そこで、各集落の個性を生かした保全の取組や、集落内の連携と強化を図ることなどによる環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習への活用が期待されます。

具体的な取組としては、大和村の大和浜集落に現存する5棟の群倉は、その保存・活用の方策などを検討するとともに、屋根葺き材となるササを確保するためササ山の維持管理の手法を検討します。

また大和村や宇検村などの各集落においてはサンゴ礁、砂浜の海岸、波の穏やかな海、良好な集落景観、伝統行事、養殖漁業などを活用して、シーカヤックや漁業体験など環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習への活用を検討します。

さらに、特に瀬戸内町においては、海岸線から砂浜、アダン、ソテツと一体となった特徴ある景観の保全と再生の検討が望まれます。瀬戸内町の加計呂麻島においてはサンゴ礁、砂浜の海岸、於斎等のデイゴやガジュマルの並木や巨樹・巨

木、木慈の垣漁跡、諸鈍シバヤなどの伝統行事などを活用した環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育、環境学習を推進します。

なお、各地域において住民が主体となった集落の海岸、里地・里山などの保全や景観形成も促進します。



加計呂麻島のカジュマル
(写真提供 (財)自然環境研究センター)

第4章 喜界島

第1節 基本的考え方

喜界島は、サンゴ礁が隆起して形成された低島であり概して平坦です。海岸は非常に乏しく、ほぼ全島がサンゴ礁で囲まれています。陸上には卓礁が隆起した百之台^{ひゃくのだい}台地など琉球石灰岩の段丘地形が発達していますが、地表面には河川の発達が見られず、森林は多くありません。地域社会は隆起サンゴ礁の島に特有の自然と関わりながら形成され、こうした関わりを示す身近な自然や景観も見られます。平坦な地形であるため農地としての利用が多く見られます。

このようなことから、この地域においては、農業などによる利用と調和を図りながら、サンゴ礁を含む海岸の自然及び身近な自然を保全する必要があります。また、隆起サンゴ礁の島に特有の自然を環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習に活用するとともに、豊かな自然に育まれた特産品等の生産など奄美のブランドの創出の推進や環境保全型農業など自然に対する配慮の徹底を図る必要があります。

第2節 地域の「宝」

1. 「サンゴ礁と海岸」に関わる「宝」

（1）サンゴ礁

島のほぼ全周をサンゴ礁（裾礁）が取り巻いています。

（2）海岸の動植物

海岸には、アダンやオオハマボウなどの海岸植生、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。

2. 「希少な野生動植物と森林」に関わる「宝」

河川は発達しておらず、森林も百之台一帯に僅かに見られるのみですが、希少な野生動植物としては喜界島固有種のヒメタツナミソウ（絶滅危惧ⅠA類）が生育しています。

3. 「身近な自然」に関わる「宝」

(1) 身近な動植物

居住地や農地の周辺には、人との関わりが深い身近な動植物が見られます。例えば、わが国最大のチョウといわれるオオゴマダラについては、生息の北限にあたり、島のシンボルとして親しまれています。他に、リュウキュウアサギマダラや島ユリなどの動植物、アダンなど防風や防潮に役立つ植物、薬草やソテツなど食用・救荒植物等が挙げられます。

(2) 身近な景観

サンゴ礁の急速な隆起によって形成された平坦な地形のもと、身近な動植物をはじめ、島内の約50カ所に及ぶ湧水、サンゴを利用した石垣、段丘面に広がるさとうきび畑などが身近な景観を形成しています。

4. 「自然と関わる産業や文化」に関わる「宝」

(1) 史跡や伝統行事

僧俊寛^{そうしゅんかん}の墓などの史跡や考祖祭^{こうそさい}⁴⁹などの伝統行事が挙げられます。

(2) 水の確保に関わる「宝」

森林や河川が発達していないため、水の確保が重要な社会的課題となってきました。このため、島内一円に点在する湧水や、地下水を利用した降り井戸（ウリガー）、最近完成した地下ダム及びトンネルといった水源が「宝」となっています。

(3) 農業に関わる「宝」

地域特産品であるさとうきびの生産が盛んである他、在来^{あきま}の柑橘類やごまが栽培されています。

第3節 主な具体的施策の例

1. 志戸桶^{しどおけ}からトビヨ崎周辺の海岸の保全と活用

サンゴ礁、岩礁、入江内の砂浜、アダンなどの海岸植生などが喜界島らしい景

⁴⁹三八月（みはちがつ）のこと。アラセツ、シバサシ、ドンガの三つは旧八月に行われる一連の行事。三八月の名はここから付いた。先祖を祭り、五穀豊穡を祈る。八月踊りがさかんに踊られる。

観をつくり出しており、砂浜ではウミガメの産卵もみられます。沿岸に国定公園特別地域、海面に普通地域が設定されています。

この地域については、まず赤土等流出防止など水質に関する配慮を重点とします。

また、追い込み漁などについては、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を進めます。

なお、この地域においては、アダン林等の自然植生の再生などの検討も考えられます。

2. 百之台周辺の地形や森林の保全

隆起したサンゴ礁（卓礁）の段丘であり地学的に重要である他、段丘崖には森林が残され湧水が分布するなど島の自然の核として重要です。国定公園特別地域や県設鳥獣保護区が設定されています。

地学的な重要性に配慮し、森林を保全することなどにより、アサギマダラ等野生動植物の生息・生育場所を確保します。喜界島固有種のヒメタツナミソウ（絶滅危惧ⅠA類）については、湿潤な環境に依存しているため周辺の湧水と一体として保全することが重要です。

段丘崖の下に立地する阿伝集落^{あでん}には湧水やサンゴの石垣など人と自然との関わりを示す身近な自然がまとまって存在しており、人材の育成や維持管理の充実によってこれを保全します。

こうした「宝」を一体として捉えてプログラムを立案し、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を図ります。

島の北部地域のさとうきび畑周辺にはリュウキュウマツ林が散在していますが、松くい虫被害を受けているため、徹底した駆除を実施します。



百ノ台（写真提供（財）自然環境研究センター）



ヒメタツナミソウ
（写真提供 喜界町）



阿伝地区のサンゴの石垣（写真提供 喜界町）

3. オオゴマダラの保全と活用

喜界島はオオゴマダラの生息の北限であり、保護条例を設けるなど町のシンボルとして保全に取り組んできました。こうした取り組みを拡充し、食草（ホウライカガミ）の植栽や保護増殖などを行います。これにあたっては、地域の住民や観光客が参加・体験する機会を設けて、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を図ります。

また、オオゴマダラの生息地に隣接する自然休養村の機能の充実を図り、喜界島全体についての情報提供や普及・啓発の拠点としての活用を図ります。



オオゴマダラ（写真提供 喜界町）

4. 「水の利用」に関わる身近な自然の保全と活用

琉球石灰岩に覆われた喜界島では、生活や農業のための水の利用が困難であり、これを確保することが地域の人と自然との関わりにとって重要でした。

全島の段丘崖や海岸には 50 箇所^{かりまた}に及ぶ湧水が見られ、その中には源為朝の伝説が残る雁股の泉なども含まれます。また、地下水を取水するための独特な降り井

戸（ウリガー）も見られます。さらに、古くから溜池がありましたが、近年は他の地域ではほとんど見られない「地下ダム」⁵⁰が建設されました。

こうした経緯を踏まえて湧水を保全するとともに、化学肥料・農薬の適正使用、家畜排せつ物の適正処理と利用等を促進します。

また、案内板や解説板など情報提供のための施設を充実させ、地域の合意のもとに環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）の資源として活用します。

5. 農産物等のブランド化

農業生産にあたって、地域特産品であるさとうきびなどの農産物や加工品のブランド化を進めます。

特に、薬草、在来の柑橘類やごまなどについては、郷土の食材として環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を進めます。また、在来の喜界馬の復活についても調査・研究を検討します。

⁵⁰ 喜界島は大部分が琉球石灰岩から成り、降雨量のほとんどが直接地下へ浸透するために河川が発達せず、農業用水等の確保のためにも、有効な水資源開発が必要とされていた。そのため、国営喜界土地改良事業によって、耕地面積1,677haを対象に畑地かんがいを行うために必要な基幹的農業水利施設として、豊富に蓄積された地下水を不透水層との間に貯水する「地下ダム」及び島内各地の畑地へかんがい用水を送るためのポンプ場、パイプライン、ファームボンドなどのかんがい施設が整備された。この他、県営等の関連事業によって、末端の畑地かんがい施設の整備が行われた。

第5章 徳之島

第1節 基本的考え方

徳之島は、北東部は井之川岳（644.8m）など標高の高い山地が多く、南西部は隆起サンゴ礁に由来する平坦な地形です。山地を中心に森林なども発達しており、多くの希少な野生動植物が生息・生育しています。また、海岸のほとんどにはサンゴ礁が見られます。さらに、集落周辺には伝統的に利用されてきた身近な自然も残されています。標高 200m 以下の地域を中心に農地としての利用が多く見られます。

この地域においては農業などによる土地利用が山地や海岸の自然と非常に近接していることが特徴です。両者の調和を図りながら、サンゴ礁を含む海岸の自然、希少な野生動植物を含む森林の自然及び身近な自然を保全する必要があります。特に、希少な野生動植物については、奄美大島とともに保全の中核となる地域として位置づけられます。また、これら豊かな資源を活用して環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習を推進するとともに、豊かな自然に育まれた特産品等の生産など奄美のブランドの創出の推進や環境保全型農業など自然に対する配慮の徹底を図る必要があります。

第2節 地域の「宝」

1. 「サンゴ礁と海岸」に関わる「宝」

（1）サンゴ礁

この地域には、サンゴ礁（裾礁）が発達しています。島の東岸では神之嶺^{かみのみね}一帯や山^{さん}、西岸では与名間^{よなま}一帯に被度や多様性の高い場所があります。

（2）海岸の動植物

海岸には、アダンやソテツなどの海岸植生、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。

2. 「希少な野生動植物と森林」に関わる「宝」

(1) 自然植生に近い森林

この地域の山地にはスダジイを主とする常緑広葉樹林が奄美大島に次ぐ規模で残されています。天城町の^{みきょう}三京などには自然植生に近い森林が存在します。

(2) 河川

この地域には秋利神川^{あきりがみがわ}、亀徳川^{かめとくがわ}、万田川^{まんだがわ}、港川^{みなとがわ}などの河川があり、その上流部は希少な野生動植物の生息・生育場所としてきわめて重要です。

(3) 希少な野生動植物

アマミノクロウサギやアマミヤマシギなど固有種・遺存種を含む希少な野生動植物が分布しており、奄美大島に次いで多くの種類が生息・生育しています。

3. 「身近な自然」に関わる「宝」

(1) 身近な動植物

居住地や農地の周辺には、人との関わりが深い身近な動植物が見られます。例えば、ガジュマルなどの動植物、アダンやフクギなど防風や防潮に役立つ植物、薬草やソテツなど食用・救荒植物等が挙げられます。

(2) 身近な景観

居住地や農地の周辺は、身近な動植物をはじめ、河川や湧水、段丘面に広がるさとうきび畑などが身近な景観を形成しています。また、ムシロ瀬や犬之門蓋^{いんのじょうぶた}など特異な海岸景観も見られます。なお、徳之島町の^{かなみ}金見のソテツ群と畑の風景は、文化庁の文化的景観重要地域に挙げられています。

4. 「自然と関わる産業や文化」に関わる「宝」

(1) 史跡や伝統行事

母間の線刻画^{ぼまのせんこくが}、戸森の線刻画^{ともり}、カムイヤキ遺跡など数多くの史跡が存在しており、アジアとの交流を示唆する史料も見られます。また、闘牛や井之川^{いのかわ}夏目踊り^{なつめおど}など独特な伝統行事が今なお盛んに行われています。

(2) 長寿

奄美群島の中でも長寿の地域として知られており、とりわけ伊仙町ではギネス

ブックに掲載された世界一の長寿者を2人輩出⁵¹しています。

(3) 農業等に関わる「宝」

さとうきびやばれいしょの生産が盛んである他、マンゴー、カンキツ類（ポンカン、たんかんなど）、芭蕉布^{ばしやうふ}、天然塩などの特産品も見られます。

第3節 主な具体的施策の例

1. サンゴ礁や海岸の保全と周辺地域を含めた活用

(1) 亀徳^{かめとく}・神之嶺^{かみのかみ}一帯の保全と活用

大兼久^{おおがねく}海岸地先の国定公園海中公園地区を中心にサンゴ礁の保全のための方策を検討します。隣接する神之嶺付近のサンゴ礁は、一部で被度や種の多様性が高いことが知られており、保護地域の設定についても検討します。

亀徳～神之嶺の沿岸はさとうきび畑が広がる景観にすぐれており、赤土等流出防止に配慮します。

この一帯に隣接する亀津及び亀徳は、亀徳港及び亀徳新港や宿泊施設の他、文化会館などの施設を有しており、徳之島全体の拠点として機能するよう検討します。



神之嶺のサトウキビ畑（写真提供 徳之島町）

(2) 金見^{かなみ}・山^{さん}・金間崎^{かなまざき}一帯の保全と活用

山^{さん}周辺の地先海面には高い被度のサンゴ礁があり、保全のための方策を検討します。金見の海岸（国定公園特別地域）には、ソテツやアダンの群落やオカヤドカリの生息場所も見られます。畦^{あぜ}と手々^{ててはま}浜の海浜公園とキャンプ場を環境教育・

⁵¹ 長寿世界一としてギネスブックに掲載された泉重千代さん（伊仙町、昭和61年に120歳で没）と、本郷かまとさん（伊仙町、1887年生、2003年9月16日で116歳になる）

環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）の場としての活用を図ります。



金見海岸（写真提供 （財）自然環境研究センター）

（3）与名間^{よなま}一帯

この一帯の地先には一部に被度の高いサンゴ礁があり、ムシロ瀬など優れた海岸景観、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。保全の方策を検討するとともに、徳之島空港に隣接した立地と海浜公園（キャンプ場やバンガロー）など既存施設を、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）の場としての活用を図ります。

（4）犬之門蓋^{いぬのもんがけ}一帯

この一帯は、サンゴ礁を観察できるダイビングスポットがあり、海岸には海^{かい}食^{しょく}崖^{がい}とアダン群落がつくる特異な景観が見られ、国定公園の特別地域が設定されています。平^へ土^ど野や天城に隣接していることから、町立図書館や中央公民館などの施設を、塔^{とう}原^{げん}遺跡などと併せて環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）の場としての活用を図ります。



犬の門蓋
（写真提供 天城町）

2. 井之川岳、天城岳及び河川上流域の保全と活用

(1) 井之川岳一帯や秋利神川流域

井之川岳を中心に^{いぬたが}犬田布岳に至る山々や秋利神川流域には、自然植生に近い亜熱帯性常緑広葉樹林が残されており、希少な野生動植物の生息・生育場所として徳之島の中で最も重要な地域です。

現在、井之川岳東部には国定公園特別保護地区と県設鳥獣保護区が設定されていますが、これらは希少な野生動植物の分布に対し十分な面積や連続性を有していないと考えられることから、保護地域の拡充について検討を進める必要があります。また、乱獲が懸念されてきたオビトカゲモドキについては、県文化財保護条例の適切な運用により保全を図ります。

また、希少な野生動植物などに影響を及ぼさないよう最大限の配慮をしながら、この地域において環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習を推進します。登山道の維持管理や、案内板・解説板など必要最低限の利用施設の整備を検討します。

さらに、道路やダムなど公共の施設の整備にあたっては、森林の連続性を極力確保するなど最大限の配慮を行います。



オビトカゲモドキ

(写真提供 環境省奄美野生生物保護センター)



三京地区の森林

(写真提供 天城町)

(2) 天城岳一帯と万田川流域

天城岳を中心とする山々は、井之川岳一帯と並んで希少な野生動植物の重要な生息・生育場所です。現在、保護地域は設定されておらず、一部の種については井之川岳一帯の分布域との間が万田川流域の土地利用によって切り離されています。

今後、適切な保全の方策を検討するとともに、万田川流域においては、土地利用や公共施設の整備にあたって特に配慮し、植生回復などの自然再生の実施を検討します。

3. 「長寿」と水・薬草・食文化等による奄美のブランドの創出

徳之島は世界的な長寿の地域であり、水・薬草・食文化などの身近な自然と関わる生活習慣がその要因として指摘されています。これを地域のイメージとして発信することにより、「長寿」を環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）やブランド化に活用することを検討します。

水については、河川や湧水の保全を検討します。また、サンゴ礁に海水を広げて精製する天然塩や、地元のイトバショウを用いた芭蕉布など、身近な自然と生活の関わりを体験できるようにして、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）に活用します。

また、生活習慣や身近な自然と長寿との因果関係などについて消費者に情報を提供することによって商品の付加価値を高め、特に、農産物やこれを加工するなどした健康食品の分野について重点的にブランド化を進めます。

この地域においては、既に一部の NPO などにより取組みが進められており、今後とも、そのような活動が広がっていくことが期待されます。



「長寿世界一」の泉重千代氏の銅像（写真提供 伊仙町）

4. 自然と関わる史跡や伝統行事の保全と活用

徳之島には、カムイヤキ遺跡など数多くの史跡や闘牛などの伝統行事が残されており、古い時代からの人と自然との関わりや黒潮を經由したアジア地域との交流を示しています。こうした観点に立って、これらの史跡や伝統行事の保全を図り、また、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）へと活用します。専門家による調査・研究の促進、水田や湧水など身近な自然と一体的な史跡の整備、闘牛などを体験するためのプログラムや施設の整備などを検討します。



闘牛（写真提供 伊仙町）



カムイヤキ遺跡の出土品（写真提供 伊仙町）

第6章 沖永良部島

第1節 基本的考え方

沖永良部島は、サンゴ礁が隆起して形成された低島であり、概して平坦です。海岸線は変化に乏しく、ほぼ全島がサンゴ礁で囲まれており、陸上には琉球石灰岩のカルスト地形が発達しています。森林などはあまり発達していません。地域社会は隆起サンゴ礁の島に特有の自然と関わりながら形成され、こうした関わりを示す身近な自然が特徴的です。平坦な地形であるため他の島に比べ耕地面積の割合が大きく、全島のほぼ半分を占めています。

このようなことから、この地域においては、農業などによる利用と調和を図りながら、サンゴ礁を含む海岸の自然及び身近な自然を保全する必要があります。また、隆起サンゴ礁の島に特有の自然を環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）に活用するとともに、豊かな自然に育まれた特産品等の生産など奄美のブランドの創出の推進や環境保全型農業など自然に対する配慮の徹底を図る必要があります。

第2節 地域の「宝」

1. 「サンゴ礁と海岸」に関わる「宝」

（1）サンゴ礁

規模は小さいものの島のほぼ全周をサンゴ礁（裾礁）が取り巻いています。大津勤などにはビーチロックも見られます。

（2）海岸の動植物

海岸には、アダンやオオハマボウなどの海岸植生、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。

2. 「希少な野生動植物と森林」に関わる「宝」

河川はあまり発達していませんが、大山付近にはスダジイを主とする森林やヘゴの自然林などが見られます。希少な野生動植物としては台湾キンギョ（トウギョ、絶滅危惧ⅠA類）が重要です。

3. 「身近な自然」に関わる「宝」

(1) 身近な動植物

居住地や農地の周辺には、人との関わりが深い身近な動植物が見られます。例えば、野生のエラブユリは、島の主産業として有名な栽培種のゆりの原種として知られています。他に、メダカやコノハチヨウなどの動植物、海岸のアダン群落や居住地周辺のフクギ、ガジュマルなど防風・防潮・防火などに役立つ植物、薬草やソテツなど食用・救荒植物等が挙げられます。

(2) 身近な景観

サンゴ礁の隆起によって形成された島であるため、ドリーネや鍾乳洞など典型的な石灰岩地形が見られます。身近な動植物をはじめ、河川や湧水などの水源、集落の石垣や石畳、潮干場跡、高倉、段丘面に広がるさとうきびや花きの畑などが身近な景観を形成しています。なお、知名町のタイモ畑の風景は、文化庁の文化的景観重要地域に挙げられています。

4. 「自然と関わる産業や文化」に関わる「宝」

(1) 史跡や伝統行事

世之主の墓などの史跡や上平川^{かみひらがわ}の大蛇踊り^{だいじゃおど}などの伝統行事が挙げられます。

(2) 水の確保に関わる「宝」

森林や河川があまり発達していないため、水の確保が重要な社会的課題となってきました。地下河川（暗川）、湧水（イジュンゴウ）、溜池、井戸、農業用水路などの水源が「宝」として挙げられます。

(3) 農業に関わる「宝」

さとうきびやばれいしょの他、ゆりやきくなどの花きの栽培が盛んです。

(4) 子は「宝」の価値観

この地域の和泊町と知名町は、合計特殊出生率が全国1位と4位であり、少子化対策への対応が全国的な課題となっているなか、その子育て環境などが注目を集めています。

第3節 主な具体的施策の例

1. 大山町有林や越山^{こしやま}の保全と活用

(1) 大山町有林の保全と活用

知名町の大山町有林は、河川や湧水の水源であると同時に動植物に生息・生育場所を提供しており、島の自然の核として重要です。現在、県設鳥獣保護区が設定されており、自然休暇村、キャンプ場、遊歩道など利用施設も整っています。既存の制度を適切に運用して保全に努めるとともに、施設の情報提供機能を充実させて自然観察の場として環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）に活用します。

また、移入種のイノシシが農作物に被害を与えていることから、有害鳥獣の駆除を実施します。



大山町有林（写真提供 知名町）

(2) 越山の保全と活用

和泊町の越山の森林は、野生のエラブユリが見られるなど動植物の生息・生育場所であり、世之主^{よのぬし}の墓や九本柱の高倉⁵²などの史跡が集中しています。現在、県設鳥獣保護区が設定されており、公園、キャンプ場、歴史民俗資料館など利用施設も整っています。既存の制度を適切に運用して保全に努めるとともに、施設の情報提供機能を充実し、地域の歴史を体験する場として環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）に活用します。

⁵² 奄美群島の高倉は、1間四方に丸柱を立て、その上に茅葺屋根をのせて、その屋根裏を倉として用いた形式が多いが、知名町には9本柱や6本柱の高倉も現存している。



ウミガメの孵化（写真提供 知名町）

2. サンゴ礁や海岸の保全と周辺地域を含めた活用

（1）^{わんじよ}湾門海岸・^{はんぎき}半崎の保全と活用

サンゴ礁、海食崖などの優れた景観とともに、野生エラブユリの生育地、ソテツの群生地が見られます。エラブユリの生育地を保全するとともに、ソテツの伝統的な利用などを環境教育・環境学習に活用します。

（2）^{よわのはま}与和浜の保全と活用

サンゴ礁を有する砂浜の海岸であり、ウミガメの産卵場所として知られます。上陸・産卵頭数の把握など保全を担保した上で、可能であれば、環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を検討します。

（3）^{すみよし}住吉・^{やこも}屋子母の海岸の保全と活用

サンゴ礁を有する砂浜の海岸であり、アダン群落、ビーチロック、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。現在、沿岸に国定公園の特別地域が設定されています。ウミガメの保全を担保した上で、シャワーやトイレなど利用施設を整備して環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を図ります。

（4）^{たみなみさき}田皆岬・^{おきどまり}沖泊海岸の保全と活用

田皆岬にはカルスト地形と海食崖の優れた景観が、沖泊海岸にはサンゴ礁と砂浜が見られます。アダン群落が発達している他、ウミガメの産卵場所やオカヤドカリの生息場所も見られます。現在、沿岸に国定公園の特別地域が設定されています。沖泊海浜公園やキャンプ場を環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を促進します。また、アダンの自然林が減少しており、その保全等について検討します。



田皆岬（写真提供 知名町）

3. 特徴ある身近な自然の保全と活用

この地域の自然は石灰岩の地形のもとに成り立っています。大山を中心としてドリーネが広がっており、南西側には昇龍洞^{しょうりゅうどう}、水連洞^{すいれんどう}、永良部洞^{えらぶどう}などの鍾乳洞が、北側の田皆岬には田皆カルスト地帯が見られます。国頭の海岸にはフーチャが見られます。また、島の各所に分布している湧水^{くわいすい}、暗川^{くらがわ}、井戸などの水系は集落の立地の基礎となり、その周辺にはガジュマル等の防風・防潮林、集落の石垣など人の生活と関わりの深い身近な景観が成り立っています。

これらの地形や水系の一部は国定公園や天然記念物の指定を受けていますが、多くの場所でドリーネや水系の埋立やゴミの不法投棄などの問題が生じています。農地等の整備や農薬の使用にあたって配慮するとともに、普及・啓発を行って不法投棄の防止に努めます。また、一部の集落においては、集落内の規定により、文化財等を保護する取組みを始めており、今後、このような自主的な取組みを広げていくことも必要です。さらに、石灰岩の島に特徴的な自然（鍾乳洞など）やこうした自然と人との関わりを紹介するプログラムの立案、ガイド人材の育成、コース設定や解説板等の整備などを行い、地域の合意のもとに環境教育・環境学習や環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）への活用を図ります。



暗川（写真提供 知名町）

4. ガジュマルなど集落の樹木の保全と活用

この地域の集落には、ガジュマル、フクギ、ソテツ、デイゴなどの巨樹・巨木が見られます。これらは、防風・防潮・防砂・防火などの機能を有し、また地域や学校のシンボルとして維持管理されてきました。保存樹指定などによって維持管理を支援するとともに、地域の合意のもとに環境保全型自然体験活動（エコツアーリズム）や環境教育・環境学習への活用を図ります。



国頭小学校のガジュマル（写真提供 （財）自然環境研究センター）

5. 湿地環境の保全

溜池、湧水、河川、水田などの湿地環境は、ホタル、メダカ、カエル類など身近な動植物の生息・生育場所として重要です。また、久志^{ぐしけん}検、赤嶺^{あかみね}、芦清^{あしきよ}良などの河川や水田には、絶滅が危惧されている台湾キンギョ（トウギョー絶滅危惧ⅠA類）も生息しています。水質の悪化を防ぐなど湿地環境の保全に努めます。

6. 「子宝」と奄美のブランドの創出

沖永良部島の和泊、知名の両町は、全国でも有数の出生率を誇る地域です。この背景として、この地域の自然や地域社会の連帯が、安心して子育てできる環境を提供していることが挙げられます。少子化への対応が全国的な課題となっている中、この地域の環境は、わが国の子育て支援や地域づくりに貴重な示唆を与えるものと思われます。

ついては、このことを地域のイメージとして発信することにより、「子宝」を奄美のブランド化に活用します。

第7章 与論島

第1節 基本的考え方

与論島は、サンゴ礁が隆起して形成された低島であり、概して平坦です。海岸線は変化に乏しく、奄美群島で最大の礁湖を有するサンゴ礁（堡礁）が発達しています。地域社会は隆起サンゴ礁の島に特有の自然と関わりながら形成され、こうした関わりを示す身近な自然も見られます。群島内で人口密度が最も高い島であり、農地など人為的な利用が進んでいます。

このようなことから、この地域においては、農業などによる利用と調和を図りながら、主にサンゴ礁を含む海岸の自然及び身近な自然を保全する必要があります。また、サンゴ礁を環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習に活用するとともに、豊かな自然に育まれた特産品等の生産など奄美のブランドの創出の推進や環境保全型農業など自然に対する配慮の徹底を図る必要があります。

第2節 地域の「宝」

1. 「サンゴ礁と海岸」に関わる「宝」

（1）サンゴ礁

この地域には、群島全体を代表するような優れたサンゴ礁（堡礁）が見られます。礁湖の幅は広い場所では1.5km以上に及び、寺崎など一部にはサンゴの被度が^{てらさき}高い場所があります。^{おおがねく}大金久海岸の沖合には、堡礁に覆い被さった美しい砂浜（百合ヶ浜）が見られます。

（2）海岸の動植物

海岸には、アダンやオオハマボウなどの海岸植生、アジサシ類の繁殖場所、ウミガメの産卵場所、オカヤドカリの生息場所が見られます。

2. 「希少な野生動植物と森林」に関わる「宝」

規模の大きい河川や森林が存在していないことから、国による絶滅危惧種などはいませんが、県による準絶滅危惧種などがみられます。

3. 「身近な自然」に関わる「宝」

(1) 身近な動植物

居住地や農地の周辺には、人との関わりが深い身近な動植物が見られます。海岸のアダンの群落や居住地周辺のガジュマルなど防風・防潮や薪材などに利用されてきた植物、ソテツなど食用あるいは救荒植物等が挙げられます。

(2) 身近な景観

身近な動植物をはじめ、湧水、段丘面に広がるさとうきび畑などが身近な景観を形成しています。

4. 「産業や文化」に関わる「宝」

(1) 史跡や伝統行事

与論城跡などの史跡や与論十五夜踊りなどの伝統行事が挙げられます。また、与論献奉よろんけんぼうなど独特の習慣も見られます。

(2) 水の確保に関わる「宝」

森林や河川が発達していないため、水の確保が重要な社会的課題となってきました。屋川やごうや湧水井戸（アマンジョー）などの水源が「宝」として挙げられます。

(3) 農業に関わる「宝」

さとうきびの栽培が中心ですが、近年、野菜や花き、果樹等も栽培されています。また、和牛（仔牛）の生産も盛んです。

第3節 主な具体的施策の例

1. 海中公園地区周辺のサンゴ礁や海岸の保全と活用

この地域では、島の全周にわたってサンゴ礁が発達しており、特に寺崎沖には被度の高い場所が見られます。大金久海岸おおがねくの沖合には、堡礁に覆い被さった美しい砂浜（百合ヶ浜）が見られます。これらは、奄美群島のサンゴ礁を保全する上できわめて重要であり、現在、寺崎地先と赤崎地先の3箇所国定公園の海中公園地区が、また、ほぼ全島の沿岸に特別地域が設定されています。

また、サンゴ礁は地域社会にとっても重要な存在です。礁湖には魚介類が豊富

に生息しており、農地の少ない与論島では、古くから「海の畑」すなわち漁労の場として住民に利用されてきました。また、台風の襲来時には天然の防波堤として機能してきました。

これらを踏まえて、海中公園地区の周辺を重点としてサンゴ礁の保全を図ります。この地域のサンゴは白化現象などの影響によって著しく減少していると思われるため、最新の状況を踏まえて保護地域のあり方など保全の方策を検討します。また、近年増加の傾向にあるオニヒトデ等については、漁協、観光事業者、観光客など幅広い主体の参加を求めながら駆除事業を充実・強化し、モニタリング調査を実施します。

また、赤土等流出防止などの配慮を徹底するとともに、合併処理浄化槽の設置や農業集落環境管理施設（堆肥センター）の設置などによって、生活排水や家畜の糞尿による地下水等への影響を低減するよう努めます。海岸には砂浜やアダン群落、ウミガメの産卵場所などが見られることから、清掃活動や浄化活動などに取り組むことなどにより、これらと併せた保全と活用を検討します。また、道路の案内・掲示板等の作成を行います。

さらに、ダイビングやシュノーケリングの他、サンゴ礁や海岸の生態系を深く知るためのプログラムや礁湖を利用した漁労体験や伝統行事の体験プログラムなどを整備し、またガイド人材を育成して、エコツアーや環境教育・環境学習による活用を促進します。



与論島のサンゴ（写真提供 与論町）



百合ヶ浜（写真提供 与論町）

2. 城地区^{ぐすく}周辺における史跡等の活用

城地区^{ぐすく}周辺には、与論城（グスク）跡を中心として地主神社や屋川（洞窟井戸）などの史跡、与論十五夜踊りなどの伝統行事が集中しています。また、サザンクロスセンター、与論民俗村などの展示・普及・啓発施設が立地しています。そこで、この地域において与論島の歴史・文化や伝統的な生活を紹介するプログラムを整備して、環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）や環境教育・環境学習への活用を図ります。

3. 農業体験と地域住民の参加

さとうきびの収穫や黒糖づくりの体験など、さとうきび農業を体験するプログラムを整備するとともに、ガイドなどの形で地域住民が環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）に参加できるような仕組みをつくります。また、このような機会をいかして豊かな自然を背景とした情報発信を通じ奄美のブランドの創出にも取り組めます。

4. ソテツやガジュマルなど身近な自然の活用

ソテツは、農地の防風林として植栽され救荒作物として食用にも供されました。ガジュマルは、薪材、家畜の飼料、集落の防風林として利用されてきました。いずれも、与論島らしい身近な景観の要素でしたが、現在は減少する傾向にあります。防風林や街路樹などとしての植栽を検討します。

5. サザンクロスセンターの拠点化

^{ぐすく} 城地区のサザンクロスセンターは、現在は展示施設としての機能が中心ですが、これを拡充して島内の「宝」についての情報提供の拠点として機能できるようにします。



サザンクロスセンター（写真提供 与論町）